

【課題提起】

秋田の動物園がめざすもの



秋田市大森山動物園 ● 園長 小松 守

まずはじめに、大森山動物園のことについてご紹介したい。

大森山動物園のある大森山公園は市の南西部にあり、北斜面に動物園がある。公園全体の面積は約72ha、そのうち動物園は13.7haである。なお、このなかには沼なども含まれており、この面積全部を動物園として活用できるという訳ではない。

日本全国の動物園と比較してみても、大森山動物園は豊かな自然環境に包まれており、春夏秋冬の違いもはっきりとしているが、一方では冬期の条件は厳しい。

交通アクセスや立地条件は決して悪くはない。大森山の頂上に登ってみると、市内を一望できるほか、日本海や男鹿半島まで見渡せるなど、大森山のロケーションは観光面でも優れていると考えている。

大森山動物園は昭和48年に開園したが、それ以前は、市の中心部の千秋公園の中に昭和25年にオープンした動物園があった。

大森山動物園のオープン以後、随時各種の施設整備を行ってきたが、市民の手によって行われた整備もある。正面ゲート付近にあるキリンの「たいよう」と「モモ」の親子モニュメントや、イヌワシのモニュメントなどがそれである。このように、市民の思いが随所に溢れている。

だが、動物園の航空写真を見てもらえば分かるのだが、園内にはたくさんの動物舎が張り付き、手狭になっている。このことは、動物園の大きな課題でもある。

さて、本年度の大森山動物園は「動物と語らう森」をテーマに、これに沿った様々なことにトライしている。コーディネーターの西木氏の話にもあった「感情移入するものがな

くなってきている」今の時代にあって、動物が言葉を発することはないが、動物と会話できるような場面づくりを模索している。そのためには、動物たちの能力をどのように引き出すのかが課題であり、「動物たちをどのように演出してあげるか」が動物園の仕事ではないかと考えている。

例えば、チンパンジーやライオンの「まんまタイム」では、エサを求めて一生懸命ジャンプする姿に来園者は感動を覚えるのだが、これは一生懸命に動く姿、すなわち生きている動物の姿に感動するのである。だからこそ、動物園は、動物の能力をどう引き出し、どのように演出し、どう伝えるかが重要になる。

動物との対話も重要だ。キリンの「エサやり体験」を例にとると、普段の展示では、柵がキリンと来園者の間のバリア(障壁)となっており、動物のパワーを感じることは難しいが、「エサやり体験」でキリンの傍にまで近づくと、動物のパワーを感じることができる。動物のパワーとは「命」であり、この「命」を感じてもらい、あるいは感じるができる体験が大切なのである。

さらにフラミンゴだが、優雅な姿を遠くから見るのが普通だが、狭い大森山動物園の展示場ではそうはいかず、近くで、更に言えば手元で見せる工夫をしている。フラミンゴは臆病な動物で、優しさを持ってそっと近寄らないと警戒され、距離を置かれてしまう。だから、大森山動物園のフラミンゴ舎を「あなたがやさしくなれる場所」と私は呼んでいる。

このように、様々な「しかけ」を考え、実施しているほか、こうした「しかけ」とは別に、様々なイベントも実施している。「春のふれあいフェスティバル」や「雪の動物園」など